

### 山本泰次郎先生のこと（3）

いつごろのことだったか、もう憶えていないが、ある時先生がこうおっしゃった。

私は、内村鑑三と新渡戸稲造の両方を先生と言えるような人の気持はわかりませんね。私には出来ませんね。

これを聞いた時の衝撃を私はいまも鮮烈に思い出すことができる。

先生はこれがある著名な内村の弟子と言われる人について言われたのだが、それが誰であり、それがどのような批判であるかはどうでもいい。またこの言葉は、単に先生の内村に対する思慕敬愛の念をあらわしたものではない。ましてや古い日本的な弟子道に則る師に対する節操の表明などではない。

私は先生の告別式における式辞の中で、先生の信仰は実に純粹であった、と言った。それはふつうに言われる心の純粹などと言うものではなく、苦難と悲哀の体験によって精錬純化された（ピュリファイド）、その純粹（ピュリティ）である。私には先生のこのことばには、その先生の信仰の純粹さがよくあらわれていると思えるのである。

先生の信仰の純粹さは、すべて物事をその本質において観る、本質的なこと以外は断然これを切り捨てて顧みない、という強い意志と、すべて物事の根本を明らかにしなければやまないという激しい情熱とにおいて最もよくあらわれていた。先生はそれゆえ、常に、あらゆる問題を宗教の本質においてとらえ、信仰のすべての問題をキリスト教の根本に照らして論じられたのである。2、3日前にも「内村日記書簡全集」第4巻「解説」における、先生の塚本虎二批判を読み返したが、その議論の適確で痛烈なのに息をのむ思いがする。

先生は実に鋭い方であった。物事の本質が何であり、物事の根本がど

ここにあるかを把握することにおいて実に鋭くあられた。だからそれが人間であれ、書物であれ、その本質をほとんど瞬時に洞察された。私は性来理解という点でも、決断という点でも極めて鈍い方なので、先生のこの鋭さは本当にこわかった。私にとって先生の全体的印象はやはり「こわい」先生だが、そのこわさの大部分はこの鋭さに起因しているのだと思う。

たとえば、本などについても、時折先生は「武藤君、〇〇を読みましたか」と聞かれる。その時先生には、その本に対する本質的な批判（肯定的であれ、否定的であれ）がおありなのである。ところが私は鈍な上に独創性の全くない、人の意見に引きずられやすい人間だから、本を読んでも成程もっともだということだけが頭に入るのみで、全体の評価とか本質的な批判だとかはなかなかできないのである。それで先生のご意見を伺ってよくわかる時もあるが、どこに先生の批判の中心があるのかよく理解できないことも一再ならずあって、困惑したものであった。

私は先生の鋭さを鋭利と言わない。もちろん先生は物事のよくわかる、何でもよく知っていて、実際によく出来る、ア・マン・オブ・アビリティというべき方であった。しかし先生の鋭さはやはり先生の純粋さと深く結びついていて、物事の本質の追求と闡明という砥石によって砥ぎ出されていったものというべきであろう。そうでなければ私のような人間が、先生に学び得たはずがないのである。

私は先生のこの鋭さが最もはっきりあらわれたのが、先生の塚本批判であろうと思う。これに較べれば、先生には新渡戸稲造などはほとんど問題にならなかったであろう。それにしても冒頭に掲げたような先生の問題意識やその提起の（塚本批判の場合も全く同じである）が、人の喜ぶものでないことは言うまでもない。特に日本人は、その精神的幼稚性（甘え）のゆえに、こういう種類の鋭さに耐えられない。現に先生の塚本批判の批判にも、確かに内村と塚本の無教会主義はちがうが、その相違が贖罪信仰に関わる福音の本質の理解把握の相違だとするのは行き過

ぎではないか、先生には塚本に対して何か個人的な感情があるのではないか、などというのがある。そうかと思えば、反対に、先生の無教会批判を鬼の首でも取ったように喜ぶ教会人もあるのである。

人は鋭くあることはできるかも知れない。また鋭さに耐えることはできるかも知れない。しかしその鋭さによって得た純粹さを貫くことはむずかしい。先生が内村の永眠後「なにびとにも師事せず」、ついには世界的にも有名になった「ウチムラ・クライス」にも屈することなく、かたくなと見えるまでに、あえて独りで生きてこられたのは、一にこの信仰の純粹さを守るためであった。いやむしろ、先生のこの純粹さが自ずと先生をそういう立場に追いやった、と言った方が正しいであろう。特に日本では、こんどはその精神的オトナ性（和の保持を至上として異を立てない）のゆえに、信仰の世界でさえも純粹であることは嫌われるものらしい。無教会こそそうでない筈だが、この頃は、無教会とさえ言えば何でもいい（どの先生でも、どの集会でも同じ）と考えるらしい、いわば人のよい無教会人も多い。内村と新渡戸のちがいさえも許容できなかった山本先生が無教会の異端であられたことも、ゆえなしとしない。

ところで私の尊敬する信仰の先輩に、山本先生を心から尊敬し、先生の信仰を深く理解して、先生の生前にはしばしば先生を訪ねられ、また先生も深い信頼を寄せておられた方がある。私はその間柄を知っていたので、かねてから此の方がなぜ先生の集会に出席されなかったのか、いささかふしぎに思っていた。先日、先生追悼のために友人たち相寄った折に、思いきってそのことをお尋ねしてみたところ、次のようなお答えであった。「私は〇〇先生（故人）の集会に、先生が亡くなられるまで出ていた人間で、私にとって先生と呼ぶべき人はやはり〇〇先生しかありません。それで山本先生は信仰の面で心から尊敬し、またよくお訪ねして親しくしていただきましたが、日曜の集まりにはそういう訳で出席しなかったのです」。それを伺って、私のこの先輩に対する敬意は一層に深められたのであった。これとは反対に、皮肉と言えば皮肉なことだ

が、山本先生と、少なくとも私には信仰的に先生とはおよそ異質ではないかと思われる人の両方を、「先生」としている人たちもある。

誰と誰とはどちらがう、などということはどうでもよい。要は、私共も山本先生のように、精神的アイマイ性を排して潔癖でありたいと願う。内村のことばで言えば、信仰の弁別 discernment である。信仰の混同を極力避けることである（続一日一生、5月14日項）。そしていうまでもないことながら、それは友情とは全く別のことである。

（所載）「テコア通信」第100号

1979年7月